

# Living the Lotus 12

*Buddhism in Everyday Life*

2025  
VOL. 243



## 立正佼成会国際仏教教会 (IBC) 心をつなぐ、在留外国人のための仏教コミュニティ



会員宅訪問



法座修行



生け花クラス



東京国立博物館見学



日本語クラス

### Living the Lotus Vol. 243 (December 2025)

【発行】立正佼成会 国際伝道部  
〒166-8537  
東京都杉並区和田2-7-1 普門メディアセンター3F  
Tel: 03-5341-1124 Fax: 03-5341-1224  
E-mail: [iiving.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp](mailto:iiving.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp)  
編集責任者: 赤川 恵一  
編集チーフ: 三川 紗知  
校閲者: 小坂 和正、菊池 克之  
編集スタッフ: 国際伝道部スタッフ

立正佼成会は1938年に庭野日敬開祖、長沼妙佼脇祖によって創立された、法華三部経を所依の經典とする在家仏教教団です。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生き、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりです。現在は庭野日鏡会長とともに、私たち会員は仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいます。

Living the Lotus—Buddhism in Everyday Life (法華経を生きる～生活の中の仏教) というタイトルには、日々の生活のなかに法華経の教えを活かして、泥水に咲く美しい蓮の花のように、人生を豊かに、そしてより価値あるものにしていきたいとの願いが込められています。本誌を通じて、世界中の人々に日々の生活のなかで活かす仏教の教えをお伝えします。

## みんなで奏でるハーモニー② 求められる自覚と役割

庭野日鏡  
立正佼成会会長



### すでに調和している私たち

「細胞は自分が働きながら他の細胞を助けているから、臓器が働くことができます。臓器も自分の働きをしながら、他の臓器を助けている」（『致知』2011年1月号）とは、筑波大学名誉教授・村上和雄先生の言葉です。先月は、世界の現状に照らして人や国の調和を乱す心と、いま私たちに何が大切であるのかについてふれましたが、私たちの体の細胞レベルでは、ごく自然にそれぞれが他と助けあい、調和をたもっているということです。そう考えると、自分たちの細胞同様に、人間が本来もつ調和する力を発揮さえすれば「世界平和も不可能ではない」と理屈ではいえませんが、それが容易でないことはだれもが知るところです。

それでも、次のどれか一つでもととのうなら、人類の調和も世界の平和も夢ではないと私は思うのです。

一人ひとりが日々を感謝でおくり、家族みんなが仲よく暮らし、それが隣近所にも影響して地域の人びとがなごやかにふれあう。さらに、平和でだれもが安心して生きられる国として他国からも信頼され、睦まじい関係を築く――。

以前から、儒教の「修身・齐家・治国・平天下」の言葉を取りあげ、とくに「齐家」（家庭を斉えること）を大事にというのも、家庭という細胞が健全であることが世界の平和につながると思うからです。家庭が「苗代」だということも、家族が互いに仲よしであってこそ人としての道をわきまえた人格が培われ、そうして育った人たちによって世界平和という実りがもたらされると信じているからです。



## 「国を愛する心」の真の意味

ところで、みなさんは日ごろ、それぞれの家庭や地域、学校や職場でどのような役割を担っているでしょうか。他を助けるどのようなはたらきをしていると、自覚しておられるでしょうか。なぜ、それをお聞きするかというと、先の細胞の例にならえば、それぞれが自分の役割を果たし、利他のはたらきをすることで調和がたもたれるからです。

ですから、周囲の人と調和し、美しいハーモニーを奏でるには、まず自分の持ち味や役割を知り、精いっぱい果たすことが大切になります。そのうえで次に、自分以外の人の声や心によく耳を澄ますことが大切です。自分の力を存分に発揮するためにも、交響楽団の一員になったつもりで、それぞれがお互いの声や心に耳を傾け、自分の音量は大きすぎないか、音が外れていないか……と心を砕く。すると、そこにいるだれもが安らぐハーモニーが生まれます。加えて、理論物理学者の佐治晴夫さんが「混乱する社会を救う言葉」と教えてくださる「ありがとう、おかげさま、お互いさま、ごめんなさい」をみんなが素直に伝えあえば、その調和は長くたもたれるはずですよ。

さらに開祖さまは、「自分の国をほんとうに愛することができない国民に、世界の人びとが心から共鳴してくれるはずはない」と断言しています。他国との調和には、国民の愛国心が不可欠だということです。ただし、これは自国優先主義や覇権主義を背景にした、戦争へ向かいかねない愛国心ではありません。祖国を愛するがゆえ、ほんとうに平和な国にしたいと念う心です。安心して暮らせる国を子や孫に残したいと願い、他国の人もそれぞれ同様に自国を愛しているのだから、お互いに戦争などできないと協調する心のことです。それは、他を敬することでもあり、ときに自己を省みて恥じることで向上の原動力にもなる愛国心です。

このように国を愛し、人を愛おしむ真に人間らしい生き方〈人道〉を忘れず、自らを灯とし、法を灯として「奪いあうのではなく分かちあう幸せ」を世界にもたらし、次代に託す、そういう一人ひとりでありたいと思うのです。

(『佼成』2025年12月号)



## SNSを縁として多くの人々が法華経で救われてほしい

IBC（国際仏教教会）  
センドラワティ（インドネシア）

### いつごろ、どのような理由で来日されたのですか？

私は2016年4月にインドネシア・スマトラ島のメダンにある高校を卒業後、子どもの頃からの日本への強いあこがれもあり、日本政府（文部科学省）の国費での大学進学を目指して奨学金の試験を受けました。その結果、その年の12月に合格し、翌年の2017年4月に18歳で国費留学生として来日しました。そして、日本語学校や専門学校で日本語や会計事務などを学び、2020年4月に駒澤大学の経済学部編入し、2022年3月に大学を卒業しました。ただ、大学在学中はコロナ禍の影響で授業や試験のほとんどがオンラインで行なわれていたこと、またサークル活動などを通じて友だちをつくることも難しく、楽しみにしていたキャンパスライフを謳歌できなかったことが残念でした。現在は東京にある日本食品の輸出・ワインの輸入会社で働いていて、国内外を問わず出張する機会も時々あります。

### その後、立正佼成会には、どのような経緯で入会されたのですか？

私が立正佼成会に入会したのは2019年3月で、きっかけはおみくじでした。2018年、2019年と初詣に行き、神社でおみくじを引いたら、不思議なことに2年続けて「神さまに近づいてください」と同じ言葉が書いてあったのです。インドネシアではイスラム教徒が9割近くを占めますが、私が住んでいたメダンには仏教徒が多く、仏教寺院もたくさん存在します。私も仏教を信仰していたので、「おみくじはきっと仏さまの大事なメッセージなんだ」と受け止めて、すぐにインターネットで「Buddhist community」（仏教徒のコミュニティー）と検索すると、IBCのウェブサイトを見つけました。その後、メールを通じて連絡を取り、初めてIBCのサンデーサービス（日曜礼拝）に参加しました。初めて発祥の地修養道場を参拝したとき、IBCのメンバーの皆さんがフレンドリーに迎えてくださったことがうれしく、また広い畳敷きの道場に私



IBC英語サンガと東京国立博物館の「運慶展」を訪れたセンドラワティさん（前列中央）

は日本文化の伝統を強く感じ、そのときの印象が今も鮮明に残っています。

### これまでのIBCの行事や活動をとおして学んだことを教えてください。

IBCでは週末ごとに英語話者グループを対象にした集いが行なわれ、私は毎月第4日曜日の式典の中で、IBC講師の河野公利さんの講話テキストや開祖さまのお言葉を読み上げるお役をさせていただいています。そのテキストや開祖さまのお言葉は、不思議なくらい自分の心の状態と一致することが多く、まるで自分に直接語りかけられているように感じます。そして、「このお言葉は今の私に必要なんだ」と新たな気づきや学びにつながっています。また今年7月のお盆の集いでは、皆さんと楽しく盆踊りをしたあと、私が選曲したマイケル・ジャクソンの『Heal the World』を参加者全員で歌い、「世界を癒そう」と平和への祈りを込めて心ひとつになれたことがとても感動的でした。

### 日本語をはじめ英語や中国語など語学が堪能なんです。

私の故郷メダンは、福建省出身の中国系住民の割合が高い都市で福建語を話す人が非常に多いので

す。ですから母語は福建語で、そして公用語はインドネシア語、さらに中国語、英語、韓国語、日本語を習得しました。また、私の母は耳が不自由なため、私は幼い頃から母とボディランゲージでコミュニケーションをとっていて、ごく自然に手話を身につけることもできました。

## 仏さまの教えの中で大切にしているものはありますか？

諸行無常の教えです。この真理は「すべてのものは必ず変化する」と教えてくれています。私はこの諸行無常の教えが救いの根本だと受け止めています。そして、人生における悲しみ、苦しみはいつまでも続くわけではなく、喜び、楽しみが変わること、そしてその喜びにも、いつまでもしがみついているはいけないことを教えてくれています。この諸行無常の教えを学んだとき、私は心の重荷が取り除かれ、執着から解放されたように感じて、信じられないような解放感に満たされました。常に感謝を忘れず、変化に動揺せず、ポジティブな心で日々を過ごしていくために、私は今もこの教えを人生の指針にしています。

## 立正佼成会の教えで心に留めているものを教えてください。

IBCのダーマサークル（法座）で「自分が変われば相手が変わる」と教えていただいたとき、とても感動しました。私たちは日常生活で苦手な人がいると、なるべくなら避けて、つき合いたくないと思いがちです。でも、立正佼成会では苦手と思うような人でも仏性があるため、それを拝んでいくと教えています。そして、他人を変えようとするのではなく、まず自分の心を深く見つめ、自

分のどこを変え、改善していけばいいかを考え、努力していく——こうした積極的で慈悲心に根ざした姿勢や生き方を学べたことが本当に有り難いと思います。

## 立正佼成会のどんなところに魅力を感じていますか？

コミュニティーとして、いつでも、どんなときも「エブリワン・イズ・ウェルカム」と優しく、温かく迎えてくださるところですね。ダーマサークルでは、お互いの経験や悩み、悲しみ、つらさ、喜びなどを分かち合いながら、法華經の教えに基づいた救いや生き方を学ぶことができます。そして、信仰の仲間という信頼関係と絆の強さが大きな魅力だと思っています。

## 最後に今、願っていること、将来の夢を聞かせてください。

私は現在、IBCの広報活動の一環として、SNSで仏さまのお言葉、蓮の花や仏像などの画像、癒しのBGMなどを積極的に情報発信しています。そして最近では、IBCサンガの皆さんと、「IBCのヤングチームをつくりましょう」と話し合っているんです。今、英語話者のメンバーは十数人ですが、これからSNSをもっと充実させて若者世代を含めて多くの人たちに仏さまの教えと立正佼成会の教えを発信していきたいと考えています。できれば、このSNSが癒しの場、コミュニケーションの場となり、それを縁として法華經の教えによって多くの人が救われてほしいと願っています。また将来の夢として私に務まるかわかりませんが、多言語スキルを生かした翻訳や通訳ボランティアなどで国際伝道のために少しでもお役に立てたらと思っています。



IBC主催のBon Festival（お盆の集い）に参加するセンドラワティさん（2列目、右から4人目）



# 十界互具

ドミニク・スカランジェロ

先月に引き続き、立正佼成会の国際アドバイザー、ドミニク・スカランジェロ博士による「即是道場 (Practicing the Dharma in the Here and Now)」を掲載します。「即是道場」は、法華経の「如来神力品第二十一」に示される「道場観」に基づき、在家仏教徒である私たちが、自宅や職場、学校など、いま自分のいる場所を修行の場として仏教を実践していくための指針を伝えています。



10月号と11月号で、私たちは十界、すなわち苦の心の状態である六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）と、悟りの境地である四聖（声聞・縁覚・菩薩・仏）について学びました。庭野開祖は、「六道という燃え盛る火宅の中にいる限り、決して苦しみから解放されることはない。真の幸福に至るためには、悟りの世界へと至らなければならない」と説かれています。

しかし、「悟りの世界に至る」と聞くと、なんだか難しそうに思えます。日常の私たちの心からは、悟りの境地は遠く離れているように感じられます。

けれども、悟りは遠くに存在するわけではありません。なぜなら迷いの世界の中にこそ、悟りの世界は見つけられるからです。

たとえば、地獄の境地である「怒り」を例に考えてみましょう。自分が不当に扱われていると感じたり、世の中が不公平だと思った時、私たちの心には怒りの感情が湧いてきます。なぜなら私たちは人に大切にされたい、世界に守ってもらいたいと願っているからです。愛されたいと願っているのです。ところが、自分が正当な扱いや愛情を受けていないと感じると、愛されたいという思いと現実との間のギャップから、私たちの心には怒りの炎が燃え上がるのです。しかし、実はこうした怒りの感情の裏側には、その対極にある「慈しみ」を求める心が潜んでいます。これこそが、地獄界に蒔かれている菩薩の種なのです。

もう一つの例として、餓鬼界の「貪り」の心を見てください。一見矛盾しているように思えますが、貪りの心の根底には充足を求める心があります。人が貪るのは「満たされたい」という欲求があるからです。無知で仏の智慧を欠く私たちは、食べたいものを食べたり、欲しいものを買ったりすることで満足を得ようとします。しかし、そうして得

られた満足は一瞬で消え去り、また次の欲求に駆られ、いつまで経っても欲求が尽きることはありません。けれども餓鬼界、すなわち貪りの心の裏側には充足を求める心があり、その心はすべての悟りの境地に共通する、静かで満ち足りた安らぎの種子でもあるのです。

これらの二つの例が示すのは、十界（十種の境地）の一つひとつに十界のすべてが内包されているとする仏の教えです。十界が相互に十界を具えていることを「十界互具」と言います。私たちが普段経験する苦しみや迷いの中に、すでに悟りの境地が存在しているからこそ、悟りの世界に至ることが可能になるのです。悟りの世界はすでに私たちの心の中に存在しています。あとは、それを現実のものにするだけなのです。

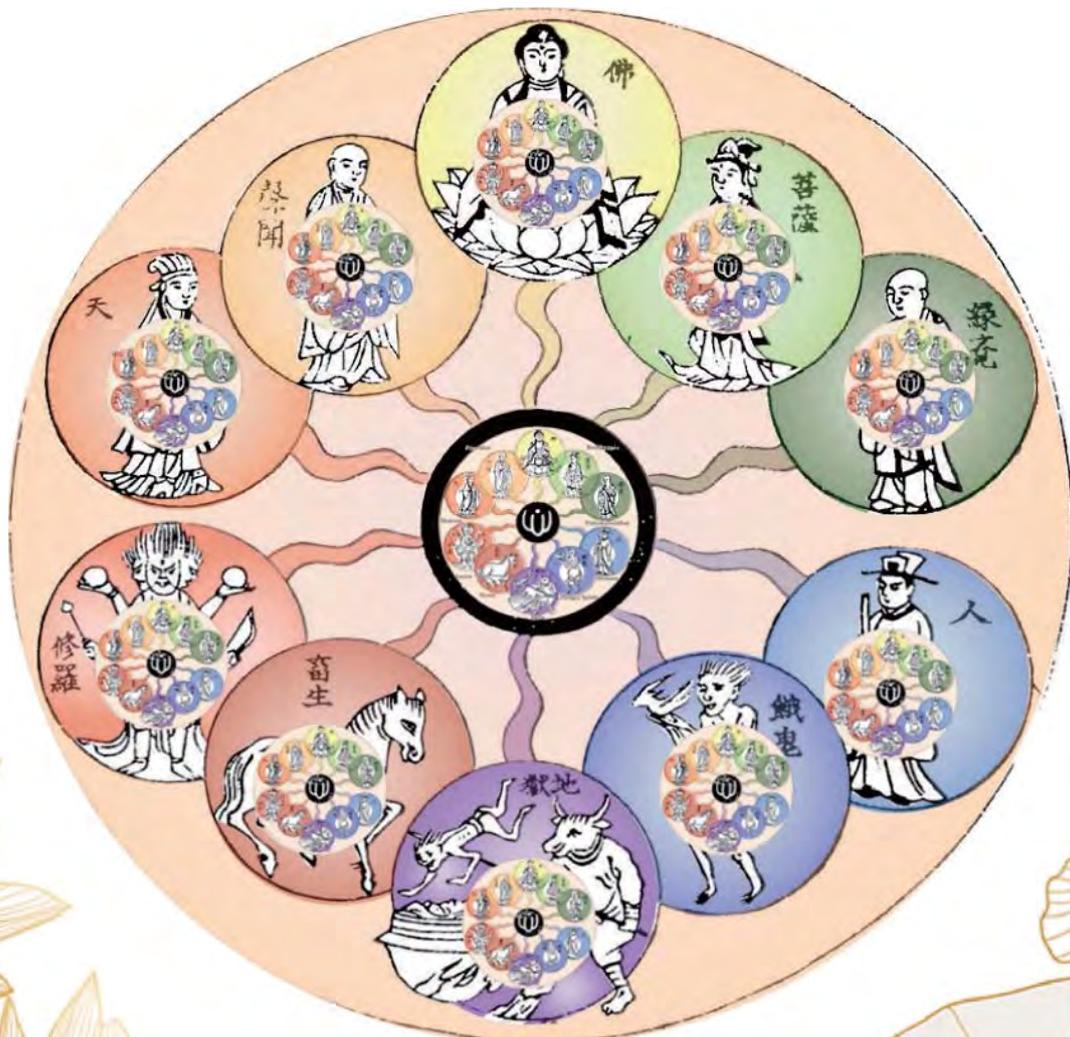
では、その方法とは何でしょうか。

『経典』の無量義経の一節は、そのための大切な指針を与えてくれています。そのひとつが、地獄界に堕ちて怒りで心が曇っている時こそ、「慈悲」の実践を心掛けてみるということです。それは何も難しいことではなく、悲しんでいる人に優しい笑顔を向け、その人の世界を照らしてあげるだけで良いのです。餓鬼界の貪りの心に陥っていたのなら、「布施」を実践してみることで。街頭で見かけた募金箱に小銭を入れる。あるいは「一食を捧げる運動」のように、十分な食事がとれていない人々に思いを馳せ、一食を抜いてその分を寄付する——そんな小さな行ないで構いません。また、自己中心的な妬みの心に囚われて修羅界に入ってしまった時は、逆に人の喜びを共に喜ぶように努めてみることで。身近な人と話すとき、その人の日々の出来事に関心を寄せ、心から「よかったね」と言葉を添える。そのようにして「あなたの喜びは私の喜び」であることを伝えるのです。

慈悲行や布施行の実践を通し、人の喜びを自らの喜びとした瞬間に、私たちは菩薩界に転生します。なぜなら慈悲・布施・随喜の心は、怒り・貪り・妬みの心の中にすでに宿っているからです。私たちに必要なのは、内省を怠らず、常に自分の心の在処を素直に認めることです。迷いの世界で彷徨っている自分の姿に気づいた時、その気づきは自らを変容させ、おのずと悟りの世界を希求する心に灯を点します。この気づきを得た時こそが、迷いの世界に潜む悟りの境地を発見した瞬間です。しかし、その悟りの世界に入るためには、仏の教えを実践することが必要なのです。

とはいえ、努力して実践しても、最初は相手に対

して心からの思いやりや喜びを感じることができないかもしれません。実践を強制されているように感じたり、自らの実践が不誠実に思えたりすることもあるでしょう。すぐにまた迷いの世界に戻ってしまうかもしれません。けれども心配はいりません。なぜなら悟りの世界——すなわち自己の仏性に目覚めた世界——は、迷いや苦しみの中に常に存在しているからです。そして、得られた気づきに意識を集中し、心に留め、実行に移すその一瞬一瞬に、私たちは悟りの世界への門をくぐることができるのです。そして実践を重ねるほどに心の深まりと純化が感じられるようになり、私たちの心が悟りの世界に留まる時間は少しずつ長くなっていくのです。



十界互具の図（『大日本統藏經』所収「円頓観心十法界図」を基に作成）



## サンガの現場レポート

〇サンゼルス布教責任者 三川恭平

私は職場でその上司に出会った日のことを今も忘れません。その日以来、私はしばしば彼に自分の仕事を不当に批判されているように感じていました。繰り返される冷たい言葉や態度に心が傷つき、私は精神的に疲れ果てていきました。一年が過ぎた頃には、彼の気配を感じるだけで吐き気や体の震えが起き、どこにいても恐怖心と疲労感がつきまとうようになりました。

そんな危機的な状況にあった私は、当時所属していた立正佼成会の教会のリーダーに助けを求めました。私の承諾を得て、彼は二人の先輩会員を招き、毎週、私のために法座を開いてくださいました。最初の法座で感じた心の安らぎは今も忘れません。

私は胸に溜め込んでいた苦しみや、つらい状況にどうすることもできない自分自身への失望を涙ながらに話しました。お二人は私に助言をしたり解決策を探そうとしたりせず、ただ私の言葉に耳を傾け、「批判されたり、冷たい言葉を投げかけられたりしたとき、どのような痛みを感じましたか?」「上司とのやりとりで何が一番つらかったですか?」と、優しく問いかけてくださいました。

話しているうちに、上司への恨みや怒りの言葉が次々と湧き上がってくることに自分自身が驚き、長い間そうした感情を抑え込んでいたことに気づきました。そして、教会のリーダーや先輩会員が用意してくださった暖かな空間の中で、恨みと怒りでいっぱいだった私の心に、ようやく安らぎが戻ってきたのです。そこでは、自分を恥じる必要も、批判される恐れもありませんでした。二人の先輩会員は、自分たちの考えを押しつけることも、私を答えに誘導することもなく、ただ穏やかに問いかけを続けることで、私が自分自身の心をはっきりと映して見られるように、平らかな鏡になってくださったのです。

数か月にわたって法座を続ける中で、私は自分の中の恨みや怒りに対する理解を、少しずつ深めていきました。そして、本当に望んでいたことは、勇気を出して自分の気持ちを正直に伝え、上司との関係を変えていくことだと気づきました。正直に、穏やかに自分の気持ちを伝えることで、状況がどう変わっていくかを知りたい。私は心からそう思うようになりました。

ある日、私は上司に直接話をしようと思

った。怖かったので、どう話せばよいか家で何度も練習をしました。そしてその日ついに、上司を責めることなく、正直に、そして穏やかに気持ちを伝えることができたのです。上司の言葉に傷ついたこと、そしてそのように私を扱うのはもうやめてほしいと伝えると、彼は黙り込み、私を傷つけるつもりはなかったこと、そして私の訴えに驚いたことを話してくれました。

その瞬間、不思議なことが起こりました。私の中で渦巻いていた恨みや怒りによる痛みが、何故かすっと消えたのです。さらに驚いたことに、上司にも変化が起きました。私に対する言葉遣いや態度が目に見えて優しくなったのです。私の目的は彼を変えることではなく、恐れずに、思いやりの心をもって、自分の本当の気持ちを伝えることでしたが、結果として、私たちの関係も変わっていきました。

振り返ってみれば、厳しい上司に出会ったこと（地獄界）、そこから自分の中に生まれた怒りや憤り（修羅界）、そして教会で助けを求めたこと（人間界）も、すべては私の「願い」のさまざまな表れだったのです。

「願う心」の本質とは何でしょうか。この問いは、人間のいのちの測り知れない本性を示しています。それはつまり、苦しみを経験するときはいつもの、同時にその苦しみを終わらせたいという願いが、自ずから私たちの心に生まれて来るとことです。不快な思いをすれば、私たちは自然と安らぎを求め、寒ければ暖かさを求めます。苦があれば、苦から逃れたいと願います。

では、この「願い」はどこから来るのでしょうか。その根源を窺い知ることはできません。しかし、この人間の本性ゆえに私たちは生き続け、自他の苦しみを終わらせようと努力を続けるのです。願いの本質は苦から解放されたいという、いのちそのものの願いであり、それは私たち一人ひとりに具わる仏の無限の慈悲と同じものです。この慈悲の心は、私たちに本来具わっているものであり、人生のどんな時も、どんな心の状態にあっても、新たに加えられることも、失われることもありません。「願う心」として現れる人間の本性そのものが、十界にゆきわたる仏の慈しみの心であるということ、十界互具の教えは示してくれているのです。



仏さまのご恩に報いる

## 自分を忘れて、人さまを

立正佼成会開祖 庭野日敬



ところで、人を仏道に導くときの大事な心得は、「この方に、ほんとうの幸せをつかんでいただきたい」という慈悲心で導くことです。

比叡山に延暦寺を開いて、日本の天台宗の開祖となったのが伝教大師最澄です。その伝教大師が、「己を忘れて他を利するは慈悲の極みなり」とおっしゃっています。この言葉をよくよく味わっていただきたいと思います。

自分のことは忘れて、人さまに親切にする。悩みを解決してあげる。それが「菩薩」の行ないなのです。

自分のことは忘れて、人さまに親切にする。悩みを解決してあげる。それが「菩薩」の行ないなのです。

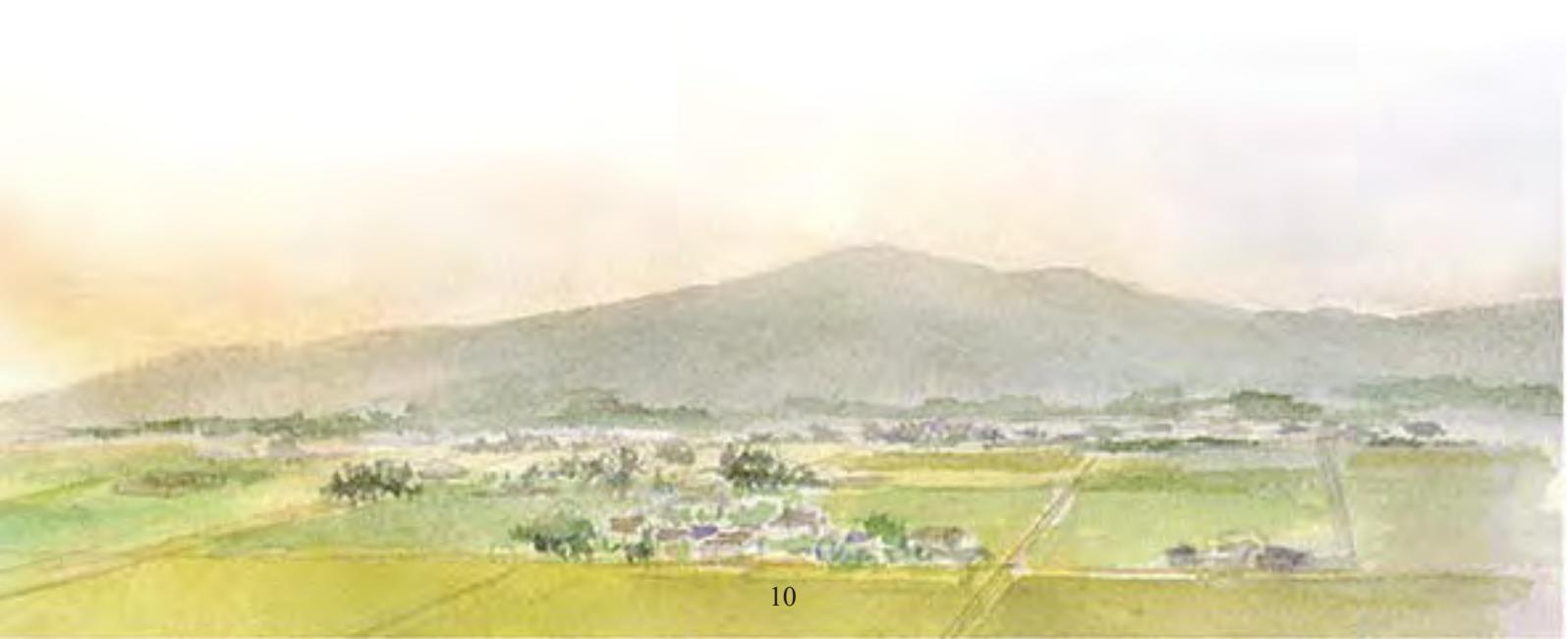
人間、「法」に入らないうちは、人生の生き方が定まらず、暗中模索で右往左往し、周囲のものごとの変化に一喜一憂するものですが、仏法に入ると、一本の道、つまり他のために尽くす喜びが自覚されてきて、心が定まるものです。その一本の道にのせてあげたいという慈悲心で導くことが、ほんとうのお導きなのです。

いま、これを読まれている方の大部分はすでに、その「道」をだれかに教えられ、導かれた人でしょう。それも、おおもとは大恩教主釈迦牟尼世尊のお導きなのですが、みなさんはそのご恩を実感されているでしょうか。なかなか実感できないという人は、ぜひ、一人でもいいから、どなたかをお導きしてみてください。

「子をもって知る親の恩」という言葉もあるように、導きの子をもってみると、自分を導いてくれた人の恩も身にしみてわかります。そして、そのおおもとであるお釈迦さまのご恩も実感できるでしょう。

繰り返すようですが、「あの方にも幸せになってもらいたい」という気持ちで、法華経の教えをお伝えしていくことが、仏さまの大恩に報いる道なのです。

庭野日敬平成法話集1『菩提の萌を発さしむ』p.88-89



## 5年間の感謝を込めて

国際伝道部長  
赤川恵一



後任の前田貴史氏  
(左)と握手を交わす  
赤川恵一部長(右)

皆さん、ごきげんよう。今年もいよいよ年の瀬が迫ってまいりました。振り返ってみると、まるで一瞬のように過ぎた一年でしたが、皆さんはどのような思いで師走をお迎えでしょうか。

今月も、会長先生から心に深く響くご法話を頂戴いたしました。一人では実現し得ない調和の世界は、各自の自覚と与えられた役割の遂行によってこそ築かれる、という内容です。このことは、40年前に開祖さまが教えてくださった、「世界平和は意外と簡単に実現できるものなんだよ。各自の自覚と調和のある行動が伴えばね」というお言葉にも繋がります。思えば、毎月の会長法話そのものが、私たちに自覚を促し続けてくださる先生のお慈悲の現れなのだと、あらためて感謝の念を深めました。

また、会長先生は調和の世界について説かれるなかで、人間の細胞のはたらきについても触れておられます。そのお話から、会長先生がよく引用される道元禅師の「他己」という言葉が胸に浮かびました。「自己をなろうとは、自己を忘れること」、つまり、己を忘れるとき、私たちは他と隔てなく生きる「他己」となります。己を立てて他を損なうこともなく、他に流されて己を失うこと

もない。真の自己とは、他を生かすはたらきとして今ここに現れる、そのような生き方をこれからも目指していきたいと思えます。

さて、私事で恐縮ですが、このたびの教団の人事異動により国際伝道部長のお役を退任し、今月から新たなお役として、南アジアのスリランカ教会とバングラデシュ教会の教会長を兼任させていただくこととなりました。併せて、私の後任者をご紹介します。東京西支教区の板橋教会長を務めておられた前田貴史さんです。本部の管理職や布教現場を長年経験された実力派ですので、皆さんどうぞご期待ください。

このような人事の変化に伴い、私が「部長コラム」を執筆させていただくのも残念ながら今月号が最後となります。これまで5年間にわたり、温かくお支えくださった Living the Lotus の愛読者の皆さんに、心より感謝と御礼を申し上げます。

今後も一人の布教者として、開祖さま、会長先生から教えていただいた在家仏教徒の道を、急がず熄まず説き弘めてまいります。

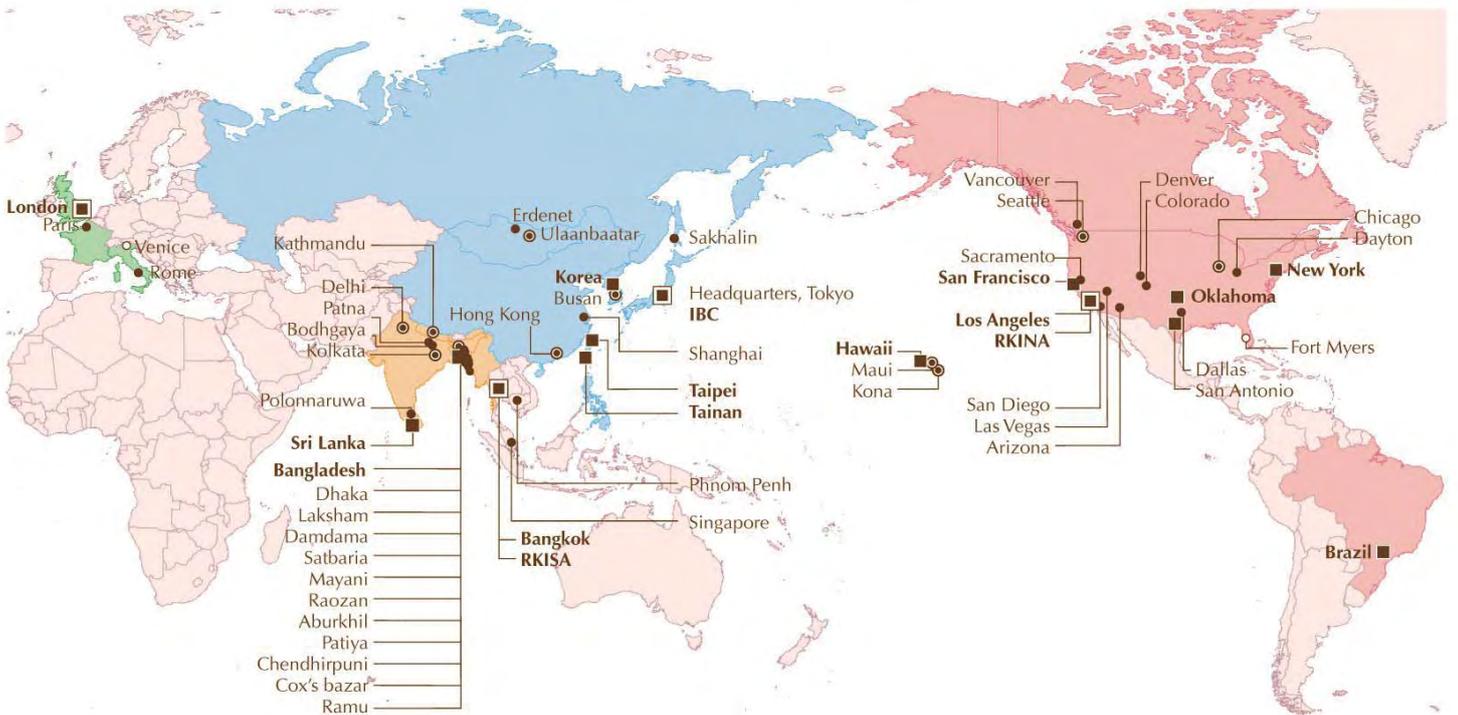
どうぞこれからも、引き続き国際伝道部と Living the Lotus をよろしく願いたします。

# Rissho Kosei-kai International

Make Every Encounter Matter



## 🌸 A Global Buddhist Movement 🌸



Information about local Dharma centers



facebook



X



✉ We welcome comments on our newsletter Living the Lotus: [living.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp](mailto:living.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp)